

人質姫は敵国ライフを

エンジョイしてるって噂①

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

城門のラッパが鳴り、石の城に冬の音が跳ねた。私の名前を呼ぶ声は礼式どおりに美しいのに、耳の奥でどこか遠い。白い手袋の下で手首がきゅつとこわばる。——大丈夫、笑顔。笑顔は甲冑。

「リグリア王国 第二王女、エリシア姫のご入城——」

視線が降る。好奇心、警戒、ただの野次。

どの目にも“人質”という厚い膜が張り付いている。

私は顎を上げて無理に微笑んだ。

目線を上げた先、階段に彼がいた。レオン王子。

背が高く、厚い肩幅に黒いマントをまとっている。

雪の降る国には珍しい、夜を切り取ったような黒い瞳に、黒い髪。

その髪は風に乱されてもすぐに形を取り戻しそうなほど整っていた。

右のこめかみを覆うように、黒髪が片目を隠している。片方の目は、

まっすぐに人を射抜くような鋭さと、揺るぎない意思を宿していた。

顎の線はくつきりと男らしく、けれど肌は雪のように白い。それだけはまさしくこの国の人だと思わせる。

一瞬目が合っただけで、胸の奥がかすかに冷えるような、それでいてなぜか熱を帯びるような感覚が走った。

「ようこそ、アルデン王国へ」

それだけ。完璧な文句、完璧な距離。

私が礼を取ると彼の視線が私の口元で一瞬止まり、すぐ宙へ逃げた。

「二年間、名誉あるお預かりといたします。必要事は侍女長へ」

「ありがとうございます。風がよく通りますね。うちの港町に少し似ていて」

場違いの感想を口にしてしまう。彼は眉をわずかに寄せたが、とがめない。ただ指先で退場の合図を送る。その仕草が妙に綺麗で、腹立たしいくらい。

儀礼がほけると、栗色の髪をまとめた侍女がずっと横についた。

「カテリナと申します。お部屋へご案内しますね」

「よろしく、カテリナ。……ねえ、城下、少しだけ見てもいい？」

「え、いま、ですか？」

そりやあそうよね。人質が自由行動を言い出すのは大胆すぎる。

でもこのまま部屋に閉じこもったら、二年がいきなり始まってしまう気がした。だから私は続ける。

「ほんの少し。悪さはしない。でも飴細工くらいは欲しいかな」

「……飴細工、ですか」

悩むカテリナの背後から、近衛が一步進み出た。

この国らしい見事な金髪。薄いブルーの瞳。

「ルーカと申します。よろしければ私が護衛に」

「助かる！」

即答した私にルーカは口元をわずかに緩めた。

短い許可が下り、私はフードを被って城門を抜けた。

空気が変わる。パンの焼ける匂い、皮革の匂い、石畳の匂い。

露店の呼び込み、子どもの笑い声、下手な笛。生きてる匂いだ。

「わあ、綺麗」

「綺麗……ですか？」

ルーカが目を丸くする。

「灰色ばかりで退屈な町だと言う人も」

「灰色は、どんな色も受け止めてくれる色よ。あ、ほら、飴！」

蜂蜜飴の屋台へ飛び込む。瓶の中で黄金が揺れている。

私は値札を見て、笑顔で身を乗り出した。

「二つ買ったら、少しだけおまけしてくれる？」

「嬢ちゃん、値切りか。港町育ちかい？」

「似たようなもの。ね、笑顔の分、少し」

両手を合わせると、店主は渋い顔で飴を一つおまけしてくれた。三人で分けようとする、二人は「勤務中なので」と固辞する。私はぱきつと飴を割り、半分をカテリナの掌に乗せた。

「規則違反にならない程度に、ね」

「……では、“規則違反ではない程度”に」

カテリナが口に入れて目を丸くする。

「ん、おいひいれす」

「でしょ」

歩くほどに人々の視線は固くなった。囁きが耳に届く。

——あの子だろ、今日来た人質の。呑気に楽しそうね。

——人質が？冗談だろ。恥ずかしくないのかね。

冗談でも本当でも、私は楽しそうにしたい。

短い散策を終えて城へ戻ると、外の喧噪が嘘みたいに静かだった。

用意された部屋は白い石壁に淡い光。暖炉の火に手をかざすと手袋の

下の傷がぴり、と反応する。袖口を指で整え、深呼吸。

「姫、今夜はもうお休みを。お湯をすぐにお持ちします」

「ありがとう、カテリナ……でも少しだけ、風に当たりたいの」

私はバルコニーに出た。城壁で折り返す風が頬を撫でる。

胸の奥で固まっていたものが、少し溶ける。

「――夜風は、風邪をひきます」

低い声。振り向くと回廊に黒いマント。月の光が横顔を削っている。
レオンだ。彼は私を見るでもない視線で立っていた。

「こんばんは王子。今日は氷点下の歓迎、ありがとうございました」
自分で言うておいて、少しだけ皮肉が強かったかもしれないと思う。

彼は表情を変えず、淡々と告げる。

「あなたが、ここでどう過ごすかは自由だ。楽しむのも、職務として解釈してかまわない」

「職務？」

「人前に立つ者として城の空気を乱さず穏やかさを保つこと。笑顔も時に任務だ」

笑顔は任務。言い方は冷たいけれど、間違っではない。私はうなずいた。

「笑うの、得意です」

「知っています」

「もう？」

「城下で。私の護衛は仕事をしました」
ルーカのことね。私は胸を張る。

「飴、半分こしました」

ほんの一瞬、彼の目が和らいた気がした。

「ひとつだけ、忠告を」

「どうぞ」

「私情は持ち込まないでください」

風より冷たい声。私は笑顔を崩さない。

崩さないけれど、笑顔の裏で小さな音がした。薄く、傷つく音。

「了解しました。私情は、持ち込みません」

「助かります」

それだけ言つて、彼は踵を返す。足音が石に吸い込まれていく。私は欄干に肘を置き、夜空を見上げた。雲が厚い。光は隠れる。私情。私の情。持ち込めるほど、まだ何も始まっていないのに。

「平気。私は私のやり方で」

小さく呟いて部屋に戻る。

手袋を外すと、手首の内側がさつきより敏感で、思わず袖で包む。暖炉の火に照らし出される赤黒い指。——大丈夫。見えない。

眠りに落ちる前、扉が二度だけ叩かれた。ルーカが恭しく頭を下げ、封蝋の小さな通達書を差し出す。

「王子から。明朝、舞踏の個人稽古のご命令です」

「……個人、稽古？」

胸の中で何かが跳ねる。冬の空気みたいに冷たいのか、蜂蜜みたいに甘いのか、まだ判別のつかない感情。

私は、目を閉じた。